

平成 30 年 8 月 3 日

倉敷市真備地区廃棄物収集運搬の災害支援 5 日目

今日は昨日に引き続き、我々のごみ収集車（交野班）が真備町箭田（やた）地区の住宅に排出された災害廃棄物を収集運搬しました。

我々にとって倉敷市真備地区の災害廃棄物収集運搬支援派遣も最終日となりました。

帰路の関係もあり最終日の作業は午前中だけの作業となりましたが、朝食後我々は、最終日に持てる力の全てを出し切りこの真備町の災害廃棄物を少しでも処理しよう！と確認し合い現場へ出ました。

これまでの活動の中で真備地区の地理にも詳しくなりましたし、災害廃棄物の特徴もつかめてきました。

最終日も我々を苦しめたのは「暑さ」と「におい」と「土埃」でした。

土埃対策で様々なマスクを持参しておりましたが、最終日ということもあり持参した各消耗品も底をつき日常使用するマスクを使用していましたが、汗と土埃でマスクが呼吸する度に「ぼこぼこ」と口に張り付き、マスク越しに息をするのもままならない状態でした。

排出された廃棄物の中で、最終日もやはり土堀の竹の積み込みに非常に苦労しました。

ごみ収集車は通常廃棄物を壊しながら積み込みを行うのですが、竹の「しなり」には非常に手間を要しました。

交野市内にも旧家は沢山ありますので、このような災害廃棄物が排出されることは容易に想像できます。我々は、この土堀の竹に負ける事は、仮に交野市における災害廃棄物の収集運搬において収集運搬できない物になるような気がして、なんとか手間をかけずに収集運搬することができないかと考え、現場で実践し経験をし、手間をかけない効率的な収集運搬に辿り着けたと思います。

これは、現場における災害廃棄物の収集運搬をとおして身につけた技術かもしれません。

この土堀の竹に代表されるように、我々が当初想像もしていなかった廃棄物の収集運搬をとおして、これまでの 20 年以上の経験を元に、いかに効率よく収集運搬できるかを常に勉強することのできた 5 日間であったと思います。

この 5 日間の災害廃棄物の収集運搬支援の中で感じたことは、これまで我々の職場においても災害時における災害廃棄物の収集運搬方法について様々な議論をして参りましたが、被災現場での収集運搬に携わらせていただいたことにより、改めて感じたことが沢山あります。

今回収集した廃棄物の中で、住民の皆様が、余裕がない中にもかかわらず、排出される浸水した家屋の廃材で、飛び出た釘の面を内側に向け紐で縛って、いくつかの木材をまとめて

排出して戴いている事例もありました。

このような形で排出していただいた災害廃棄物は、安全面での配慮について手間を要することなく積み込みを行うことができます。

このほかにも、全国各地での被災地の状況を見ていると、災害発生後ボランティアセンターが機能します。その中で全国から応援に来てくださるボランティアの皆様に対して、まず何をさせていただくか、統一した一つの準備や方針があるか無いかでは、その後の災害廃棄物の収集運搬にかかる手間は大きく変わりますし、「土埃」「におい」の対策にもつながると思います。

実際に災害が発生したときにそのような余裕はないのかもしれませんが、防災や、予防はとても重要なことです。

しかし今回の災害支援の業務により発生後の動きをシュミレーションし、災害発生後には、必ず発生する災害廃棄物の収集運搬を迅速に行う準備をしておくことの重要さも、改めて考えなければならない重要な災害対策であると実感しました。

自然の猛威には人間は無力であることを痛感したことはもちろん、今回の経験を交野市に持ち帰り災害発生後にいかに迅速に行動し、市民の皆様が生活が一日も早く元の状態に戻れるために何をすべきかは、今回のように、我々行政職員が、災害支援を経験させていただくことの重要さと、被災された地域の皆様の尊い経験を参考としながら、準備を蓄積していくことの重要さを改めて感じました。

本日の午前の業務で今回の災害支援業務も一端終了となりますが、交野市に持ち帰り、環境事業所内で経験を共有し、可能であれば第二陣を派遣するなどし、復興へ向かう真備地区を環境事業所職員の複数の目で確認し、交野市職員としてのスキルを高める事が交野市の災害対策にとっても大変意味のあることであると実感しました。

大変貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

(8月3日18時45分交野市環境事業所帰庁)

交野市環境部環境事業課

倉敷市真備地区災害廃棄物収集運搬支援派遣隊

赤楚 雅邦

竹中 良人

小嶋 輝昭

須見 昌広

交野市環境部次長兼環境総務課長（倉敷市連絡調整）

藤原 功

交野市環境部環境事業課（派遣職員連絡調整）

水井 幸信

交野市環境部環境総務課（派遣職員連絡調整）

山中 真衣